

カメラ
ルポ

防水に生きる

(565)

まず社会貢献ありき

(東京都)

草場 清則 (72歳)
多摩防水技研(株) 代表取締役

世界的規模の環境保護運動であるSDGs。草場清則さんは、ポリウレタ樹脂と自己消化性のある断熱材を武器にして「エコで災害に強い街づくり」を目指している。シーリング工事業からスタートし、バブル崩壊後は生き残りをかけて多能工化を実現させた。並行して、障害者との協働作業体にも身を投じてきた。そしていま、建物の長寿命化に貢献できる独自の防水材料を生み出し、メーカーとして新たな一歩を踏み出した。その行動力の源泉は、近い将来、工場システムの一部に障害者や高齢となった技能員の働ける場所を作り出すためだ。2020年に工場施設を購入した。いよいよ草場さんの夢が花開く。

シーリングで稼いで農場を買う

北九州のみかん農家に生まれた草場さんは、宮沢賢治に憧れて東京大学農学部を目指すのが、学費と生活費を得るための新聞配達の仕事で勉強時間が思うように取れず、結局、千葉大学の園芸学部農芸化学科に進学した。その頃、千葉県は成田闘争の渦中にあり、闘争への参加をきっかけにいつしか農業共同体を目指すようになった。長野県の農業試験所に就職内定していたが、仲間と府中市に共同生活体を作った。そして自分たちの農場を作る資金を稼ぐため、当時は高収入が得られたシーリング工事の技能員

になった。「1日で1万円稼げました」。共同農場に向け、経営形態を学ぶため、数多くの共同体を渡り歩いた。縁あって養護学校の卒業生を預かることになったほか、当時1歳の長女が



2002年、54歳のとき、シーリングの実大実験でシドニーへ

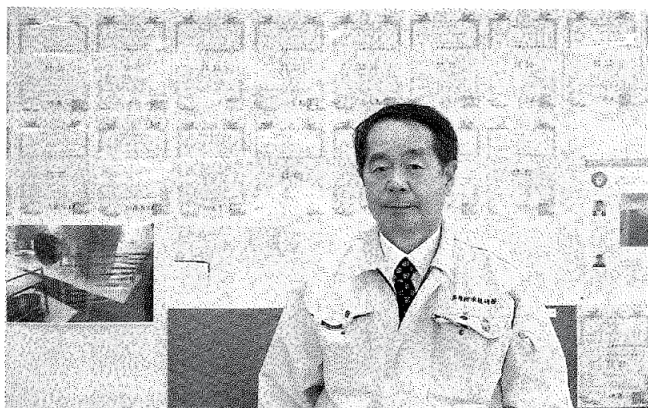


敷地内は暴露試験場のよう

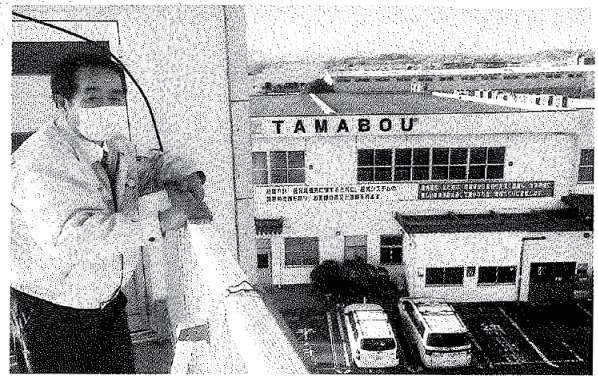
悪性脳腫瘍と診断されるといった諸事情がいくつか重なったことから、共同農場は諦め1984年に生活基盤を作るためシーリング工事会社として草場工業を設立した。並行して、欠損家庭の子供や知的障害者と呼ばれる若者らを建築業に従事させる協働作業体も確立させた。

当時の建設業界はバブル期で活況。翌年は現社名に変更して法人化し、(株)マサルの協力会社として多摩地区における鹿島建設(株)のほとんどの仕事に携わり、堅実に事業を拡大させてきた。マサルの協力会社の組織である勝栄会の副会長を約10年間務めるまでに会社は成長。東日本シーリング工事業協同組合の技術委員として、業界の健全な発展のために力を注いだのもこの頃だ。

しかし、バブルが弾けるとシーリング工事業と協働作業体との両立は難しくなってきた。当時のマサルの社長だった故・操上弘昌氏に相談したところ、多摩地区における鹿島建設の仕事の直請けする許諾を得た。そして、障害者らの生活基盤を生活保護やグループホームへ移し、事業の立直しに奔走した。



取得特許の数々



「いよいよ夢が現実になります」

工場におけるSDGsのイメージ図



「メーカーになるしかないですよ」

バブル崩壊後は、生き残りをかけてシーリング工のほか、ウレタンゴム系塗膜防水、止水、躯体補修なども手掛ける多能工会社に切り替えた。そして、超速硬化スプレー防水(ポリウレア成分約80%)を知る。ウレア樹脂は、素早く強固な防水層を形成する。その効果を思い知らされたのは、2011年に発生した東日本大震災時に建てられた仮設住宅の防水工事だった。「一刻も早く被災者に安心して暮らせる住まいを提供したい」と切望する草場さんの期待に、超速硬化スプレー防水は応えた。福島などで復旧作業に従事するうちに環境問題への意識が高まり、エコ事業部を立ち上げ、太陽光発電システムや高日射反射塗料といった地球温暖化対策技術も事業に取り入れた。

さらに、建物の長寿命化には高耐久性の防水層が不可欠という結論に至った。ポリウレア樹脂は耐久性の高い防水を求める施主に自信をもって提案できると確信したが、草場さんが理想とする高耐久性を実現するには既存の防水システムでは限界があった。付合いのある防水材料メーカーの重役に特別仕様を要求するが、事業が成立しないと断られ「自分がメーカーにな



安全大会にて



鹿島建設OBの一人と（草場さんの隣）

るしかないですよ」と諭された。しばらくは気落ちしたが次第にその一言が起爆剤となり、草場さんは防水材料のメーカーになることを決意する。

塗膜防水の課題は膜厚管理だ。それを解決するため、ロボットによるポリウレア樹脂のシート化を実現させた。シートジョイント部は、開発した二成分系ポリウレア樹脂系接着剤の処理で解決した。「これで長寿命化に対応できる」。9年前、某学校施設の庇の防水30㎡を、ポリウレア防水シートを使って一日で完工させた。その後も、JIS不燃認定のポリウレアでコーティングした難燃性の断熱防水パネルや、集合住宅の浴室防水改修工法などを発案し、すでに17件の特許を取得するまでになった。そして2020年、八王子市に1400坪の敷地の工場を購入し、防水材料メーカーとしてスタートを切った。「後は突き進むだけです」。

“梁山泊”を目指す

30年以上、現場で職長として働いてきた。多くの現場でともに働いた、現在65歳を超す技能員の8割近くが厚生年金に加入していない。一方、グループホームで働く障害者の将来も気がかりだ。それらを少しでも解決するため、メーカーとしても成功し、障害者や年老いた技能員が働け



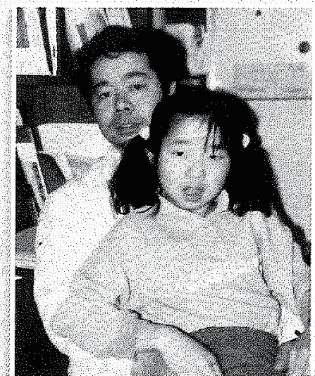
長女の実香さん（左）やお孫さんたちと一緒に

る部署を工場のシステムの一部に作りたいと熱望する。鹿島建設の3人のOBや、社員他多くの人との恵まれた出会いに支えられての現在だと感謝する。

これまで東京都から経営革新計画を3回承認されており、異業種の企業約30社と連携して新技術の開発を進めてきた。社員も楽しんで仕事に取り組んでいる。「誰もが魅力的な人物ばかりです。この工場を職人たちの“梁山泊”にしたい」。草場さんの夢は広がる。

草場 清則氏（くさば・きよのり）

1948年8月22日、唐津市に生まれる。千葉大学園芸学部農芸化学科を卒業。認定NPOやまほうし副理事長・日本リノベーション・マネジメント協会関東支部役員。現在は東京都八王子市在住。社会学者の見田宗介東京大学名誉教授の「人間解放」理論に感化される。氏の提唱する「高められた地平を安定して持続する『高原（プラトー）』」の視点から、今得ているものを次世代に継承することを目指している。



幼い頃の次女、千沙さんと